

論文

高木八尺の学習・信仰・留学—ヘボン講座担当に向けて

小川原 正 道

1 はしがき

高木八尺は第一高等学校、東京帝国大学法科大学、同大学院での学習、大蔵省を経てハーバード大学などに留学し、その間に内村鑑三、新渡戸稲造などからの信仰的・人格的感化を受けて、自らの学問と信仰を形成し、帰国後に東京帝国大学法学部の初代ヘボン講座担当教授を務めた。

高木自身は東京帝大の学生時代について、次のように回想している。

ぼくははじめに感服したのは、1年の時の上杉慎吉さんの憲法でした。……やっぱり一番強く印象にあるのは、小野塚喜平次先生の政治学ですね。その頃から先生の名著の『政治学原論』という本は入手困難の有様でした。

それで色々の論文を一心に勉強して、小野塚先生の論文といたら、えらい厳格なものだという印象をうけました。それに学者のあり方を教えられました。それから吉野作造先生ですね。それから立作太郎先生の国際法と外交史です。¹

さらに高木は、新渡戸の植民政策は聴いたかと問われて、次のように答えている。

ええ、いまだにおぼえているのはね、今考えればフロンティアの話なのですが、クレール・ド・ボワ (coureur du bois)、「森を走りまわる狩人」ということを先生がフランス語でいわれたことをいまだにおぼえております。

それから植民政策の講義は、のちに矢内原君の骨折りで出版されました。たしか私と大内さんのノートを土台にして。²

このように、高木が学生時代に、上杉慎吉（憲法）や小野塚喜平次（政治学）、吉野作造（政治史）、立作太郎（国際法・外交史）、新渡戸稲造（植民政策）から、学問的影響を受けたことがうかがえる。

高木については近年、そのアメリカ研究の時代背景や国際秩序認識、第二次世界大戦前後のアメリカ理解、太平洋問題調査会への関与、戦後の日米知的交流などについての研究が蓄積されている³。とりわけ、渡井誠一郎や竹林克将、有賀貞らは、高木のアメリカ研究の特徴をピューリタニズムとフロンティア学説に見出し、後者については、ハーバード

大学留学時代に教えを受けたフェレデリック・J・ターナーの影響によるものであることを明らかにしてきた⁴。

前者と関連して、東京大学における高木の後継者である斎藤眞は、ピューリタニズムをアメリカ外交の思想的背景をなすと見なした高木を、「カルヴィニズムの教義に立つピューリタンのキリスト者」と捉えるのは「誤解」を招きかねないとして、あくまでキリスト教が自己変革を遂げて「普遍化」することを目指した点に注意を喚起している。その点で高木は、キリスト教が「自己検討」と「再認識」を通じて「普遍的人類的信仰」として成長するであるという、ウィリアム・E・ホッキングの洞察に励まされることが多かった、という⁵。高木はハーバードで、ホッキングから哲学を教授された。

他方、冒頭に掲げた高木の回想にあるように、留学前の東京帝大時代、あるいは一高時代に受けた学問的影響も看過できない。そうした高木の原点とも言うべき、留学前の学習、信仰の形成過程、また、留学の経緯・準備の過程については、政治経済学や経済学への関心に若干の光があてられる程度で⁶、その全体像は十分あきらかにされてはこなかった。信仰観の形成において重要な意味をもったとされるホッキングとの交流の具体像も、ほとんど解明されていない。

そこで本稿は、今回新たに発見したハーバード大学アーカイブス所蔵の高木関連史料(第一高等学校長・東京帝大法科大学長の卒業証明書、ハーバード大学大学院への入学申請書、履修科目・成績表など)や高木の回想録などを用いて、高木の留学前の学習、信仰の形成、また留学にいたる過程・準備について、東京帝大の学生時代を中心に、なるべく詳細に検討しようとするものである。これにより、高木が帰国後にヘボン講座を担当するにあたって基礎となった学問的・信仰的基盤が、より明瞭になるに違いない。帰国後のホッキングとの交流についても、ハーバード大学ホートン図書館所蔵史料(高木・ホッキング往復書簡)によって検討を加え、その具体的様相の一端に触れたい。

高木のアメリカ留学は、東京帝大法学部におけるアメリカ憲法・歴史・外交講座としてのヘボン講座担当を前提としたものであり、同講座は高木以降、日本のアメリカ研究を牽引していくことになるため、本稿では留学の事前学習や留学が同講座の学問的性格をどう特徴付けて出発したのかについても考察し、東大と日本におけるアメリカ研究のひとつの原点について検討することで、東京大学史に若干の貢献を試みたい。

2 東京帝国大学在学期の履修科目とその影響

高木は1915年(大正4年)に東京帝国大学法科大学を卒業したが、その学生時代に履修した授業科目は、ハーバード大学に留学する際に1919年11月12日付で東京帝大法学部長・仁井田益太郎名で作成された卒業証明書に記載されている⁷。『東京帝国大学一覧』⁸によって高木在学中の科目担当者を付記すれば、以下のようになる。

「憲法」穂積八束／上杉慎吉
「公法学」不明
「政治史」吉野作造／坪井九馬三
「経済学」金井延／山崎覚次郎／河津暹／矢作栄蔵／松岡均平
「経済学史」和田垣謙三
「政治学」小野塚喜平次
「統計学」高野岩三郎
「法制史」宮崎道三郎
「海運論」若宮貞夫／市村富久
「政治学史」不明
「外交史」立作太郎
「行政学」清水澄
「法学」不明
「社会政治」不明
「国際私法」山田三良
「植民政策」新渡戸稲造／松岡均平
「民法」松本烝治／仁井田益太郎／土方寧／川名兼四郎／富井政章／奥田義人／乾政彦
「行政法」美濃部達吉／笈克彦
「国際公法」立作太郎／高橋作衛／寺尾亨
「財政学」松崎蔵之助／工藤重義
「商法」岡野敬次郎／松波仁一郎
「ドイツ政治学」不明

これにより、高木がその回想の通り、上杉の「憲法」、吉野の「政治史」、小野塚の「政治学」、立の「外交史」、新渡戸の「植民政策」の授業を履修していたことが、確認できる。

高木が影響を受けた上杉、小野塚、新渡戸、吉野、立が高木の東京帝大在籍当時、どのような講義を展開し、高木がそれをどう受容したのか、これを明らかにすることは難しい。このため、高木の在籍当時に科目担当者が展開していた著作活動に着目し、そこから高木が影響を受けた可能性について、若干の推測を試みたい。

まず上杉慎吉は、1912年に刊行した『帝国憲法綱領』において、「帝国ノ国体」は「日星」のようなもので、「政体」も憲法の条文上明確だが、学者の間では「異説」があり、本書は憲法学者として自説を明らかにし、その要領を示そうとするものであると記した上で⁹、「立法権モ、司法権モ、之ヲ有スルノ主体ハ唯一天皇タリ」と、自らの天皇主体説を展開している¹⁰。国体に関する憲法学説に諸説があるとしつつ、立法権・司法権の主体を天皇とするもので、美濃部達吉らの天皇機関説と対立する主張であった。上杉は当時、自説を

めぐって美濃部と論争を繰り広げている渦中にあり、高木もその一方の主張の内容、あるいは自説を展開する姿勢などから、何らかの影響を受けたかもしれない。

小野塚喜平次は『国家学会雑誌』や『法学協会雑誌』で意欲的に論考を発表していたが、例えば『国家学会雑誌』1912年10月号に掲載された「愛蘭自治問題ノ政治的觀察」では、アイルランドの歴史、自治法案の経緯・内容を論じた上で、自らのアイルランド自治問題についての「政治的觀察」を示すものの、それは「事実ノ公平ナル觀察」であって「私見」を交えたものではないとしている。自治に対する「反対党」が「自治法案」を破壊するために手段を問わず、「名士」が「内乱」を「煽動」しているのは「立憲制ノ模範国」として嘆かわしいと小野塚は述べ¹¹、公平な觀察を試みつつも、あくまで安定的な政治秩序を希求しようとする姿勢を示している。

第一次世界大戦下の『国家学会雑誌』1915年1・2月号掲載の「現代ドイツノ軍国主義トライチケノ学説」で小野塚は、大戦勃発当初のイギリス首相とドイツ首相を比較し、現代ドイツの軍国主義や軍国主義鼓吹学者について論じた上で、ドイツでトーマス・カーライルやトーマス・B・マコーリーに比肩する「勢力」を得て、イギリスから見ると「現代独逸ノ軍国主義ノ化身」であるハインリヒ・フォン・トライチュケの学説を分析している。小野塚はトライチュケについて、その学説は「単純ナル軍国主義」ではなく、「深甚ナル理想的道德的分子」が混入しており、その「誠実熱心活動献身等ノ諸美性」の故に、「主観的理想ニ向テ突進」していくと評した。その先には、「国際道德」の退歩とドイツの「不利」が待っているという¹²。アイルランド自治問題で反対派の「破壊」や「煽動」を批判したのと同様、ここでもトライチュケ思想の「突進」という急進性に警鐘を鳴らした。

冒頭に記したように、高木は小野塚の論文を読み、その「厳格さ」に「学者のあり方」を教えられたと述べているが、『国家学会雑誌』は東京帝大法科大学の学生にとって、もともと身近な学術雑誌であった。高木はこうした、著者の私見を排した客観的・禁欲的叙述や、政治的問題を歴史的・思想的に考察し、時事問題に流されずに政治の本質を見極めようとする姿勢、また、急進的変革を嫌い、安定的な秩序を希求するスタンスに、「学者のあり方」を感じ取った可能性がある。

新渡戸稲造については、これも冒頭で高木が述べているように、高木のノートなどをもとにした講義録が刊行されている。矢内原忠雄が編集した『新渡戸博士植民政策講義及論文集』がそれで、矢内原はその「編者序」で、同書は自らのノートを「基幹」とし、高木と大内兵衛のノートで補完して完成したと述べている¹³。

このため、講義録の内容の一端を、高木が学び取っていた可能性は高い。新渡戸はここで、植民思想の形成や植民の理由・目的・利益、植民の語源と定義、植民地の種類・類別、植民地獲得の方法、植民地の統治、植民地の土地問題、原住民政策、植民政策の原理などについて論じている。アメリカに関する記述を見ると、まず、「コロンブスのアメリカ発見も、半は宗教的の目的から出た」として、「近世」において「教化」を目的として

植民地が獲得されたことはないものの、「宗教伝道」が植民の「有力なる原因」となったことは歴史上の事実だという。19世紀の初めからキリスト教による外国伝道が盛んになり、多数の伝道会社が設立されて世界各地に宣教師が派遣されたと述べた上で、新渡戸はアメリカのフィリピン統治について、経済的観点から持続不可能であると評している¹⁴。

また、アメリカ国内の先住民について新渡戸は、「ヘレン・ジャックスン (Helen Jackson) といふ米国婦人」が先住民を憐れんで支援活動を展開し、「ロッキー山の頂に“A Century of Disgrace” (『恥辱の一世紀』) と刻したる石碑」を建てて、アメリカのインディアン政策に警告を与えたという。新渡戸は、先住民に対して「為すべき施設を為さざりしこと」は、「罪惡」であり、これを「Sin of omission」(為さざるの罪) だと述べた上で、日本国民の植民思想に「公の良心」(public conscience) が不足していることについて批判した¹⁵。「罪」や「良心」を重んじるキリスト者としての新渡戸の特徴が現れている。

新渡戸は、ヨーロッパによる植民地獲得の一大原因となった宗教伝道は、商業的展開を導いて原住民を苦しめ、その怨恨は根深いとして、日本の宗教による植民地伝道にも疑問を呈している¹⁶。日清・日露戦争などを経て、すでに日本仏教は大陸での布教を大規模に展開していたが、その影響に否定的見解を示したものである。

こうしたアメリカのフィリピン統治に対する否定的評価や、先住民政策、日本国民の植民思想、植民地統治における宗教伝道の意義に対する懐疑は、高木のアメリカ観、欧米観の形成に少なからぬ影響を与えたかもしれない。

吉野作造は第一次大戦下の1915年1月から7月にかけて『中央公論』で「欧州動乱史論」を連載し、同年にこれを『欧州動乱史論』として刊行している。同書で吉野は、オーストリア皇太子暗殺事件やオーストリア・ハンガリー関係、大戦開戦経緯と露・独・仏・英・伊の参戦過程、トルコの運命などについて論じている。あくまで自らの「印象」であって「研究」ではないものの、「合理的考察」に基づかない「臆断」でもない、とその不完全さを表明しつつも、吉野は時事的な問題に応答すべく、これを開陳した意図を示した¹⁷。『中央公論』は当時、知識階級に広く読まれた総合雑誌であり、高木もこうした吉野の学者としてのスタンスや、第一次世界大戦という未曾有の事態に対する国際政治的理解を深めていった可能性があるだろう。

立作太郎もまた、第一次大戦に対する学術的要請に応えていった。『国家学会雑誌』1914年11月号に掲載した「欧州戦争と各国最近外交関係」で立は、第一次大戦の原因はバルカン半島における「独逸人種の東方に押し寄せやうとする運動」とスラブ民族の「理想」との衝突にあるとして、ヨーロッパ各国の参戦過程を分析し、同論文は、ナポレオン戦争をも凌駕する規模の第一次大戦を中心にヨーロッパの外交関係の大枠を示すものだとしている¹⁸。

立のこうした主張を通してまた、高木は第一次大戦に対する国際法・外交史的理解を深めたかもしれない¹⁹。

3 アメリカ留学の経緯・準備

東京帝大での学習を踏まえた上で、大学院を経て大蔵省に入った高木に、東京帝大法科大学に新設されるヘボン講座の担当者となる話が、新渡戸から寄せられた²⁰。その経緯について高木は、次のように回想している。

大蔵省に入りまして間もなくでしたけれど、東京大学法学部（当時法科大学）に、米国講座（ヘボン講座）というものが寄附されて、1918年2月より、最初は美濃部先生の「米国憲法の由来及び特質」という講義があつて、第二番目の講義として新渡戸先生の「米国建国史要」というお話がありました。

そのたしか第2回目の時に私は平日でありましたけれど、役所を怠けて行ったんだろうと思いますが、講義に出席しました。そして講義のあとで、新渡戸先生から「米国講座というものが設けられることになったが、それをやってみないか」というお話があったわけです。そこで、しばらく考えさせて頂いてお答え申し上げることにしたいということをお願いしました。

それから先生にも、もう少し詳しくお話を伺ったり、内村先生とか黒木さんなどの意見も聞きましたが、だんだん私も決心ができて、新渡戸先生に、お受けしたいとおもいますとお答えしたわけです。

それからだんだんと手順が進められて、そしてまあ将来の講義の担当者としてこういう候補者を推薦したいからという提案、それが法学部教授会で認められるというような段取りになりました。今はっきりおぼえておりませんが、教授会で決まった時に、新渡戸先生から電話を頂いたことを未だにおぼえております。²¹

こうした経緯を経て、高木は大蔵省を1918年11月に退職し、法科大学講師を嘱託された。法科大学の研究室で吉野作造の机の脇に席をもらった高木は、美濃部や新渡戸の講義などを聴きながら、ジェームズ・ブライスの『The American Commonwealth』を読み、「『西洋史講話』という大著を出しておられた箕作元八先生」（東京帝国大学文科大学教授／西洋史第一講座担任）と面会、アメリカ西部の歴史が重要だと教示を受けた。高木は後年、「未だにその箕作先生の御注意を忘れずにおります」と振り返っている²²。

ヘボン講座担当者となるべく選ばれた者は、講座を寄附したアロンゾ・B・ヘボンとの取り決めによって、約3年間、アメリカで留学・研究することとなっていた²³。高木にハーバード大学に留学することを勧めたのは、実父・神田乃武のアマースト大学同級生で、当時ブラウン大学の教授を務めていたフランクリン・J・ジェームソンで、高木はジェームソンの影響について、こう語っている。

まさにジェームソンのアレンジといえますか、彼が留学の当初から私のアドヴァイ

ザーになってくれ、私にターナー（Frederick Jackson Turner）に就て学べとすすめてくれたのですが、たまたまもう一つ幸いしたことには、偶然にその頃に、1919年の春ですけれども、後藤新平伯が新渡戸先生も一緒に数名のパーティーを作って、アメリカとヨーロッパに行かれた、丁度その時にぶつかったんです。

例えば、ニューヨークで私をヘボンにひきあわせてくださったのは、そういう意味で新渡戸先生がたまたまアメリカにおられたということに由来するわけです。

のみならず、新渡戸先生の一行がワシントンにおられるということを知って、私もワシントンにまいりましたが、その時やはり新渡戸先生が、色々私のみならず、本当に西も東も分からない私の新婚早々の英子というものに、学校のことも知っておく方がいいと、ワシントンでわざわざミス・マデーラ・スクール（Miss Madeira School）というクエーカー教徒の学校ですが、そこに新渡戸先生が紹介して下さったということなどもあります。²⁴

こうして渡米した高木はワシントン DC で病床に伏せたが、ジェームソンが見舞いに來た際に、たまたまオリバー・W・ホームズ・ジュニア（アメリカ連邦最高裁判事／ハーバード・ロースクール卒）がロビーを通りかかり、ジェームソンが紹介してくれたため、ハーバードに行きたいと相談すると、自分が現地に行って、その先のプランも自分で決めるべきだとアドバイスしてくれたという。高木は、ジェームソンは終始自分のプランを心にかけて、ボストンに到着して以降も相談に乗ってくれて、ターナーのもとで歴史を学ぼう勧めてくれた、と回想している²⁵。

1919年6月頃にはじめてケンブリッジを訪問した高木がターナーと面会し、夏の過ごし方を相談したところ、ターナーはマックス・ファランドの『Development of the United States』、ジョン・H・ラタネーの『From Isolation to Leadership』などを読むようアドバイスし、「ゆっくり勉強して9月にやってこい、という風にして別れました」という。高木はアマースト大学図書館でこれらと『Riverside History of the United States』全4巻などを勉強した²⁶。

このように、高木の就職と留学の斡旋をしたのは新渡戸とジェームソン、ホームズ、ターナーであった。

留学前の事前学習過程において、高木がいかにアメリカに対する基礎的理解を獲得していったのか、その内容を検討しておこう。

まず、箕作元八は『西洋史講話』において、上古史（西洋文明発生時代、東西衝突時代、東西文化融合時代）、中古史（西ヨーロッパ混乱時代、政教大統一理想時代、国家主義発生時代）、近古史（イスパニア・フランス対抗時代、イスパニア強勢時代、フランス強大時代、ヨーロッパ権力平衡主義流行時代、大革命時代）、最近史（新旧主義衝突時代、自由独立主義実現時代、世界政局革新時代）と区分して西洋史を論じており、アメリカについては、米墨戦争を経て南方・西方に領土を拡大させ、奴隷問題などに直面して南北戦争

が起こり、これを経て、その基礎を固めていったという歴史観を示している²⁷。箕作が高木に教示したアメリカ西部の重要性もまた、これに支えられていた。

ジェームズ・ブライス²⁸の『The American Commonwealth』は合衆国憲法の起源から連邦政府の性格、大統領権限・義務、上院・下院の役割、連邦裁判所の機能、連邦制の短所と長所、州の構造などについて概説したもので、ゲイリー・L・マクドウェルによると、トクヴィルに対する批判的考察の成果として本書を発表したブライスは、「絶対的」にイングランドを前提とし、アメリカ共和制の有益な「訓練」も「アイルランド支配を支援する傾向」と「アイルランド独立問題を回避するための合同主義の圧力」のもとにあったと解説している²⁹。オックスフォード大学でローマ法の教授を務めつつ、自由党の庶民院議員でもあったブライスにとって、アイルランド独立問題の回避は現実の政治課題であり、そのために有益と考えられたのが、アメリカ共和制理解だったわけである。

マックス・ファランドの『The Development of the United States from Colonies to a World Power』は、植民地時代を経て独立したアメリカ連邦政府の特徴とデモクラシー、南北戦争と国家の再建、経済と政治、台頭するアメリカなど、テーマごとにアメリカの歴史と理念を概説したもので、ファランド自身、ブライスやターナーなどを踏まえ、フロンティアの重視をアメリカ史研究の伝統的視点とした上で、こうした成果をより一般に広く、提供しようとしたと述べている³⁰。

ジョン・H・ラタネーの『From Isolation to Leadership, a Review of American Foreign Policy』はモンロー主義の起源と体系化やヨーロッパの勢力均衡との関係、開放政策、モンロー主義の帝国主義的特徴、汎アメリカニズム、中立と孤立の終焉、アメリカの戦争目的について取り上げた専門書で、「モンロー主義」が「帝国主義的な傾向」から「国際主義的」となり、アメリカが国際連盟に加入した場合、「我々は同盟と協商の緩衝材となてはならない」といった主張を展開している³¹。この著書が刊行された1918年の1月には、ウッドロー・ウィルソン大統領が国際平和機構（国際連盟）の設立を提唱し、アメリカのモンロー主義が転換されようとしていた。

また、ウィリアム・E・ドッドが編集した『The Riverside History of the United States』全4巻は、アメリカ移民史、独立、南北戦争、戦後の政治、行政、経済、開拓、ポピュリズム、米西戦争、セオドア・ローズヴェルトなどについて概説し、1914年の連邦議会選挙の解説で完結している。「西洋世界の歴史において、アメリカの独立宣言は傑出した重要性を持った」として、独立宣言は「デモクラシーが存続するであろうという信念とともに、人々の思考を転回させた」と評するなど、独立宣言とデモクラシーを重視する歴史観が特徴的である³²。

こうした事前学習を踏まえた上で、高木はハーバード大学大学院に入学する。高木はすでに、アメリカの政治体制に関する基礎的理解やフロンティア、独立宣言の重要性、転換しつつあるモンロー主義についての理解を獲得していたものと思われる。

高木が1919年9月23日にハーバード大学大学院（The Graduate School of Arts and Sciences, Harvard University）に提出した入学申請書には、東京帝大では「政治経済学」と「経済学」を専攻して1915年に卒業したこと、主な指導教授は小野塚と新渡戸であったこと、1920年に修士の学位を取得することを希望すること、ドイツ語とフランス語は「初等教育レベルの知識を十分に習得しているとは考えていない」こと、などが記されており、東京帝大では「欧州史」「政治史」「経済史」「外交史」を学び、大学院で「経済史」を専攻したと述べられている³³。

1919年11月8日付の第一高等学校長・菊池寿人による卒業証明書には、高木が3年間ドイツ語を、2年間ヨーロッパ史を学んで試験に合格した旨が記載されており、仁井田による東京帝大の卒業証明書には、「彼は一年間大学院で歴史経済学について特別な学問を修めた後、大蔵省に在籍しました。彼は学生時代に「ヨーロッパにおける食品材料の供給」と題するエッセイを執筆し、1913年に第3回小寺賞を受賞しています」と記されている³⁴。

高木がハーバード大学大学院で履修した科目と成績、担当者は、次のようなものであった^{35 36}。

・1年次（1919年-1920年）

Economics 2b-2 (abs.)

Economic History of the United States, Prof. Edwin Francis Gay

Government 23 (incomplete)

Selected Cases in International Law, Prof. George Grafton Wilson

History 17a-1 (B-)

The History of the West to 1850, Prof. Frederick Jackson Turner

History 17b-2 (B)

The History of the West 1850-1920, Prof. Frederick Jackson Turner

History 25hf (B)

Historical Bibliography and Criticism, Prof. Charles Homer Haskins

History 32a-1 (B-)

American History: The Foundation of the Union, 1760-1829, Dr. Samuel Eliot Morison

History 32b-2 (B)

American History: The Development of Nation, 1830 to the Present time, Prof. Edward Channing

・2年次（1920年-1921年）

Government 12a-1 (B-)

American Political Organizations, National, State, and Municipal, Prof. Albert Bushnell Hart

History 13a-1 (B-)

American Constitutional History, Prof. Charles Howard McIlwain

History 56-1 (C)

History of Latin America, Asst. Prof. Julius Klein

Philosophy 5-1 (B+)

Philosophy of the States, Prof. William Ernest Hocking

こうした学習を踏まえて、1921年2月に高木は「Master of Arts」の学位を取得、同月12日にハーバードを去った^{37 38}。

なお、これらのハーバード大学における履修授業やサマースクールの授業などのうち、「CPAS 高木八尺デジタルアーカイブ」では、19冊の高木の筆記ノートが公開されている³⁹。

例えば、ターナーの「The History of the West to 1850」の筆記ノートによると、ターナーはファランドやローズヴェルトなどを紹介した上で、「ニューイングランドは米国史において西部から大きな影響を受けた」として「フロンティアの重要性」や「インディアン支配の重要性」を語っている。高木の事前学習を強化・理論化するものであり、高木は十分にその内容を理解し、受容したものと思われる⁴⁰。

4 信仰形成の過程

こうした学習の過程で、高木は自らのキリスト教信仰を深めていった。高木が信仰を深めていった過程について、高木自身、回想録で次のように述べている。中学2年生の頃に神田乃武から「古ばけた新約聖書」をもらい、「マタイ伝の五章のところを読んでみよ」と言われ、それが新約聖書を手に取って勉強しはじめたきっかけだという⁴¹。

神田や学習院教師でエマソン主義者の服部他之助から「広義のピューリタニズム(ニューイングランド精神)」を学んだ高木は⁴²、学習院中等科卒業前年の1907年(明治40年)12月31日に内村鑑三の弟子・黒木三次に連れられて内村と初めて面会した。その際、内村から「日曜の集まりに出るならば、やっぱり高等学校に入ってからの方がいい」として、「それまでの仕事として自分の著書を全部読んで来い」と言われ、「一生懸命に先生の本を読みました」と高木は語っている。『後世への最大遺物』を手始めに、『地人論』、『興国史談』などを読み、「先生の歴史観に影響された」という⁴³。

第一高等学校入学後の1909年に内村の日曜集會に出席することになった高木は、東京帝大法科大学の学生などで作られた柏会にも参加した。1913年頃が柏会の活動がもっとも盛んであり、度々会合をもったが、「色々の議論、例えば祈りということをどういう工合にすべきかというようなことがありました」として、内村から「俗化する危険」から回避するには「祈りをしてつくす」ほかないと言われたという⁴⁴。祈りをはじめとする信仰面は、内村の著書や内村との対話によって深められていったのであろう。

東京帝大に入学後、新渡戸の自宅が解放されて「面会日」が設けられたが、高木は一度も行ったことがなく、内村に「注意を集中」し、「修養という新渡戸先生の旗印より、もっと信仰的なものを求めたいという気持が強かった」と高木は述べているが、新渡戸の「信仰をまぜたような修養の話」からは「非常に大きな影響を受けたと思います」という⁴⁵。新渡戸より信仰的なものを内村に求めつつも、新渡戸の修養には影響を受けたわけである。

神田によって聖書と出会った高木は、内村鑑三の読書や柏会への参加、祈りの深化を通して「信仰的」な影響を受け、新渡戸稲造の「修養」にも感化されていった。

高木は後年になっても、内村や新渡戸に関する著作を数多く記している。1952年（昭和27年）に発表した「Dr. Inazo Nitobe and Christianity」は「太平洋の架け橋」としての新渡戸の小伝で、新渡戸が瞑想や良心の自由、教育の普及を強調するクエーカーの信仰を重んじ、精神的な聖書解釈を強く心に抱いて言動や行動をとり、「全人格的な人間の発達に生涯を捧げた」点を強調している⁴⁶。

同年に著した「デモクラシーの精神的基礎」で高木は、東洋では「デモクラシーの精神的基礎」が欠けているため、「不安定」「動揺」「心のすき」「反乱の素地」が生まれており、「デモクラシーの最後の砦」は「神の下に権利と共に義務を認める、この人格である」点を強調し、「個人人格の観念と、デモクラシーの理念の根底には、神に対する信仰が前提されることを会得しないと、その真意はつかめない」と論じている⁴⁷。

1956年発表の「Kanzo Uchimura: The Significance of His Position in the Japanese Intellectual History」は、高木による内村の小伝で、1909年に柏会の初会合が催された際、内村が日本の将来的目標としてデモクラシーを強調し、「実際、内村は新渡戸稲造や吉野作造とともに、独立した個人の尊厳を理想とする、日本における数少ないデモクラシーの優れた支持者の一人であった」と指摘している⁴⁸。

1966年に「新渡戸稲造の宗教思想を探究し、日本人によるキリスト教の受入れの問題を考察する」と題するエッセイを著した高木は、新渡戸の生涯と宗教観を解説し、「彼の宗教は一言に尽くせば人の意志を重視する実践的のものであった」としつつ、説教は行うことは稀で、「その精神を教育者の講演の形に盛って、従って宗教に世俗の衣を着せて、述べるが多かった」として一高での倫理講話に言及し、「信仰は意志の決断に因る。我らは意志を以てする実践を求められるのであろう。それが、新渡戸の生涯の課題であり、また今日の課題であると思われる」と結論した⁴⁹。

同年に刊行した「新渡戸稲造先生の宗教を中心として」で高木は、新渡戸の宗教、教育、特に一高でのカーライルに関する連続講演および修養談について取り上げ、国際連盟時代の宗教論を解説した上で、新渡戸の宗教が持つ今日的意義について、「第一に、私ら一人一人の、キリスト教に対する判断・決意の問題」であり、各人が「独自の道」をたどって、人間の「究極の関心事」たる神に向かうこと、「第二に、現代に対する日本のキリスト者の責任」として、キリスト教に「普遍主義的世界宗教」としての活力を与えるために協力

すること、が重要だと主張し、「普遍的宗教の愛の力」による文明形成の精神を高唱・実践するよう呼びかけている⁵⁰。

1967年に国際文化会館で行った講演録「Japan and Christianity」で高木は、新渡戸を中心に近代日本におけるキリスト教史を概観し、「キリスト教精神の受容が、最終的に我々の宗教的遺産を最も活性化させる上で役立つ」ことを強調した⁵¹。同年の国際文化会館での講演録「日本と基督教」では、日本人のキリスト教受容は「形式」より「精神」を軸としており、「制度」より「思想」を優先したとして、内村鑑三不敬事件をあげ、これを「日本の思想史上、人間個人の人格の観念の発生にとって画期的の事件」だとした上で、「彼がキリスト教の真髓と信ずる所にあくまで忠信であったが、他面には、無教会の主張にも現れる様に、形をすてて心を取る強い態度があった」と評した。新渡戸のキリスト教観も根幹において内村と大差なく、「今や信仰の決意と実践の精神の要請に対し、我らの応うべき時は熟しているように思われる」と高木は述べている⁵²。

このように、デモクラシー、人格、宗教的遺産の基盤としてキリスト教信仰を位置付け、その実践と「普遍主義的世界宗教」への発展の重要性を説き、新渡戸と内村を模範とするのが、戦後における高木のキリスト教論の特徴であった。

5 結びに代えて

これまでの高木研究では看過されてきたが、以上で論じたように、高木は東京帝大の学生時代、小野塚喜平次から客観的、歴史的、思想的な政治分析の手法と学者としての態度を、新渡戸稲造からはアメリカのフィリピン統治、先住民政策、植民地伝道の問題点を、吉野作造と立作太郎から最新の第一次世界大戦情勢について学んだ可能性がある。

アメリカ留学はヘボン講座の開設と新渡戸からの勧誘を前提としたもので、新渡戸やジェームソン、ホームズ、ターナーによる斡旋と支援・指導によって実現し、アマーストでの事前学習などによって基礎的なアメリカ理解を習得した上で、ハーバード大学大学院入学にいたっている。信仰面では、中学生時代に聖書と出会い、一高、東京帝大時代に内村鑑三の教えを受けて、内村の読書や柏会への参加、祈りの探究を経て「信仰」を形成し、新渡戸から「修養」的感化を受けた。

アメリカ留学を経て構築された高木のアメリカ史理解について古矢旬は、「ピューリタニズムとフロンティア」の交錯を通してアメリカ・デモクラシーの形成と発展を説明するもので、この両者が「理念的に抽出された歴史的要素」であったと評している⁵³。斎藤眞も、高木はこの両者をアメリカ・デモクラシーの「二大支柱」として実証的・学術的に研究し、古典的民主政から大衆民主政への転化を追及して、日本の「形式上の民主化」ではなく、いかに主体的な人間の人格を構築するかが、その胸底に流れる課題であったと指摘している⁵⁴。

高木自身、「ターナーの「西部の歴史」の後段の講義」を聴き、ハラルド・J・ラスキがチャー

ルズ・H・マッキルウェインを称賛し、その勧めでマッキルウェインの授業を聴講したことなどを振り返り、マッキルウェインは「大体アメリカの歴史をやりながら、憲法の面から説明を加えて」いき、「私のハーヴァードの生活は、大体そんなものでした」と振り返っている⁵⁵。ターナーがフロンティア学説の泰斗として、1920年に『The Frontier in American History』を刊行したこと、マッキルウェインが1924年に『The American Revolution: A Constitutional Interpretation』を出版したこと、2人がいずれもピューリッツァー賞を受賞したことは、論を俟たない。

高木がターナーの講義で、そのフロンティア学説を学んでいたことは先述した通りであり、またよく知られている。しかし、高木がすでにハーバード入学前からターナーと接し、そのアドバイスで読んだファランドを通じてフロンティア学説に触れ、渡米前にも新渡戸や箕作を通じて、フロンティアやアメリカ西部の重要性を学んでいたことも、見過ごすことはできない。高木のフロンティア学説の形成と展開には、ハーバード入学前の学習また、大きな意味をもったのである。

高木の信仰観の形成において多大な意味を有したとされるホッキングとの交流について、その具体像はこれまで定かでなかったが、ハーバード大学ホートン図書館所蔵の「William Ernest Hocking papers」には、1930年代から1960年代までの高木・ホッキング往復書簡が多数収録されている。

1935年7月2日付の高木宛書簡でホッキングは、日本は公教育においてモラルの要素を重要視しているとした上で、「立憲思想」をうまく保存しつつ「市民権に対する宗教の精神的価値」を活用している例は他国に見られないと評し、1939年2月19日付の高木宛書簡では、現在取り組んでいるテーマとして「生ける宗教と世界的信仰」をあげている。高木も戦後の1964年4月13日付のホッキング宛書簡で、「我々日本人はキリスト教の精神を受け入れ、キリスト教的世界文明を基軸とすることに向かって、仏教や儒教の伝統を持つ我々自身の文明を接続することが重要だと考える」と書き送った⁵⁶。

こうしたホッキングとの宗教論議が、高木の宗教観に少なからぬ影響を与えたのは間違いない⁵⁷。高木自身、戦前から戦後にかけて、訪米の機会があるごとにホッキングのもとを訪れて教えを乞い、「ホッキングの考えが私には非常に受け入れ易いと思われ、そんな線に沿うてほそぼそながら晩年の努力を続けておりました」と述べ、その成果として自らの講演「Japan and Christianity」をあげている⁵⁸。

デモクラシーの基盤としてキリスト教信仰を位置付け、これを普遍的・世界的宗教へと発展させていこうとするのが、政治学者でもあった高木の特徴的な信仰観であり、それは、ホッキングとの交流を通して強固なものとなっていった。その信仰観の基礎が、すでに一高、東京帝大の学生時代に形成されたことは、すでに指摘した通りである。そうした意味で、高木のハーバードなどでの学習・生活・人脈形成は、その留学前に形成された学問や信仰の基礎の上に立って展開されてこれを強化し、その後の活動に接続していった、と言っ

てよからう。

高木は帰国後、1924年1月にヘボン講座の担当を命じられて、その最初の講義内容を同年6月・12月の『国家学会雑誌』に「米国史概観（上）（下）」として発表した⁵⁹。高木はここで、「「ピルグリム」始祖等が自由の国を建てんと渡来して以来、北米の発達歴史は一貫せる一民族の成長発展の記録」だとして、「ピューリタン」の思想が社会組織に具現化した点を強調する。さらに高木は、「米国史の特長は十九世紀末に至る迄此のFrontierが常に国の西方を画してゐたといふ事実である」として、フロンティアで国民が「新なる生活」を経験して新鮮で「democratic」な風習を形成し、「社会組織の改造」を繰り返してきたと述べた上で、1893年に「Significance of the Frontier in American History」を発表したターナーが「西部の歴史」における権威となったと評した⁶⁰。高木はこの論文を、次のように結んでいる。「非を改め善を行ふに勇敢なる世界の一国として、理想への精進を忘れざらんことを希ふ者である⁶¹」。

ハーバード留学のみならず、留学前の学習と、これらを踏まえた研究を前提に、同講座は初期の段階から、ピューリタニズムとフロンティア学説に特徴付けられることとなった⁶²。その上で、高木がいかにして自らの歴史的視座と学問目標を確立し、昭和戦前期から戦後にかけて、どのような学者としてのスタンスから、学術的・社会的活動を展開していったのか。その具体的な経緯の検証については、別稿を期したい。

註

- ¹ 「高木八尺先生に聞く（Ⅰ）（聞き手：岩永健吉郎・斎藤眞）」『American Studies in Japan Oral History Series』Vol. 6 No. 1（1979年）、33頁。
- ² 前掲「高木八尺先生に聞く（Ⅰ）」、35頁。
- ³ 渡井誠一郎「日本における学術的アメリカ研究本格化の背景——日露戦争以降の実業・学界によるアメリカ認識および高木八尺の研究内容から」『歴史学研究』第1040号、2023年10月、渡井誠一郎「戦間期における知識人の対外政策および国際秩序への認識—高木八尺による議論を中心に」『駿台史学』第178号、2023年3月、竹林克将「高木八尺の戦前と戦後—アメリカを通してデモクラシーを見る」『国際関係論研究』第37号、2022年9月、三牧聖子「高木八尺と太平洋問題調査会—対米協調と新秩序追求のはざままで」『アメリカ太平洋研究』第22号、2022年3月、中嶋啓雄「高木八尺と戦後の知的交流の再生——アメリカ研究との関連を中心に」『アメリカ太平洋研究』第22号、2022年3月、高光佳絵「高木八尺と戦前期の日米関係——「太平洋問題調査会（IPR）」を中心に」『アメリカ太平洋研究』第22号、2022年3月、など参照。
- ⁴ 前掲「日本における学術的アメリカ研究本格化の背景」、48-52頁、前掲「戦間期における知識人の対外政策および国際秩序への認識」、5-6頁、前掲「高木八尺の戦前と戦後」、4-5頁、東畑精一「高木八尺先生とターナー教授」高木八尺『高木八尺著作集』第1巻・月報1、東京大学出版会、1970年、1-3頁、有賀貞「高木八尺におけるアメリカと日本」『キリスト教と諸学』第19号、2003年12月、127-128頁、など参照。

- 5 斎藤眞「日本における国際学研究の先駆者Ⅰ——高木八尺」(『明治学院論叢(1) 国際学研究』1987年3月)、26-27頁。斎藤は、「高木八尺先生のアメリカ研究」斎藤眞等編『現代アメリカの内政と外交——高木八先生古稀記念』東京大学出版会、1959年、380-381頁、においても、同様の指摘をしている。
- 6 高木は東京帝大2年生の頃にアーノルド・トインビーの『Lectures on the Industrial Revolution of the 18th Century in England』を読み、「ヨーロッパにおける穀類の供給」と題する論文を書いて、小寺奨学金に応募した(前掲「高木八尺先生に聞く(Ⅰ)」、31-32頁)。留学前の学生、大蔵省勤務時代に高木が政治経済学や経済問題に関心を寄せたこと、トインビーの著作を読んだこと、それらの思想的影響などについては、植村泰三「アメリカ研究に求められる英語力に関する一考察——高木八尺の思想史に淵源を求めて」『日本英語教育史研究』第14号、1999年5月、2頁、前掲「日本における学術的アメリカ研究本格化の背景」、47-48頁、前掲「高木八尺の戦前と戦後」、7頁、などで検討されている。
- 7 UAV. 161.201.10. box105.yasaka, Harvard University Archives.
- 8 東京帝国大学編『東京帝国大学一覧 従明治四四年至明治四五年』東京帝国大学、1911年、東京帝国大学編『東京帝国大学一覧 従大正元年至大正二年』東京帝国大学、1913年、東京帝国大学編『東京帝国大学一覧 従大正二年至大正三年』東京帝国大学、1914年、東京帝国大学編『東京大学一覧 従大正三年至大正四年』東京帝国大学、1915年。
- 9 上杉慎吉『帝国憲法綱領』有斐閣書房、1912年、「序」。
- 10 前掲『帝国憲法綱領』、75頁。
- 11 小野塚喜平次「愛蘭自治問題ノ政治的觀察」『国家学会雑誌』第26巻第10号、1912年10月、1490-1491頁。
- 12 小野塚喜平次「現代ドイツノ軍国主義トトライケノ学説」『国家学会雑誌』第29巻第1号、1915年1月、33-52頁、小野塚喜平次「現代ドイツノ軍国主義トトライケノ学説(承前完結)」『国家学会雑誌』第29巻第2号、1915年2月、157-208頁。
- 13 矢内原忠雄「編者序」矢内原忠雄編『新渡戸博士植民政策講義及論文集』岩波書店、1943年、2頁。
- 14 前掲『新渡戸博士植民政策講義及論文集』、34-69頁。
- 15 前掲『新渡戸博士植民政策講義及論文集』、152-153頁。
- 16 前掲『新渡戸博士植民政策講義及論文集』、172頁。
- 17 吉野作造『欧州動乱史論』警醒社書店、1915年、「はしがき」。
- 18 立作太郎「欧州戦争と各国最近外交関係」『国家学会雑誌』第28巻第11号、1914年11月、1553-1597頁。
- 19 東京大学大学院総合文化研究科グローバル地域研究機構アメリカ太平洋地域研究センターが所蔵する「高木文庫」には、立から高木への書簡が5通収録されており、両者に交際があったことがうかがえる(「高木文庫」東京大学大学院総合文化研究科グローバル地域研究機構アメリカ太平洋地域研究センター所蔵、フォルダ番号・166、624)。
- 20 ヘボン講座設置の経緯については、斎藤眞「草創期アメリカ研究の目的意識——新渡戸稲造と「米
国研究」斎藤眞著／古矢旬・久保文明監修『アメリカを探る——自然と作為』みすず書房、2017年、山内晴子「渋沢栄一のヘボン講座支援——朝河貫一と高木八尺——デジタル版『渋沢栄一伝記資料』を使用して」『渋沢研究』第30号、2018年1月、など参照。
- 21 前掲「高木八尺先生に聞く(Ⅰ)」、39頁。引用文中の「内村先生」は内村鑑三、「黒木さん」は、一高で内村の教えを受け、1912年に東京帝国大学法科大学を卒業した黒木三次のこと。黒木はのちに

伯爵、貴族院議員などとなる。

- 22 前掲「高木八尺先生に聞く (I)」、39-40 頁。
- 23 斎藤眞「解説」高木八尺『高木八尺著作集』第1巻、東京大学出版会、1970年、547頁。
- 24 前掲「高木八尺先生に聞く (I)」、45 頁。
- 25 前掲「高木八尺先生に聞く (I)」、46 頁。
- 26 前掲「高木八尺先生に聞く (I)」、48-49 頁。
- 27 箕作元八『西洋史講話』開成館、1910年、936-946 頁。
- 28 高木はのちにイギリスを訪問した際、ジェームソンからブライスを紹介されている（前掲「高木八尺と戦後の知的交流の再生」、31 頁、Nakajima, Hiroo, “Beyond War: The Relationship between Takagi Yasaka and Charles and Mary Beard”, *Japanese Journal of American Studies*, No. 24. 2013, p. 129）。
- 29 McDowell, Gary L., “Introduction”, in Bryce, James, *The American Commonwealth*, Indianapolis, Liberty Fund, 1995, pp. xvii-xxiii.
- 30 Farrand, Max, *The Development of the United States from Colonies to a World Power*, Boston, Houghton Mifflin, 1918, pp. vii-ix.
- 31 Latané, John Holladay, *From Isolation to Leadership, a Review of American Foreign Policy*, Garden City, Doubleday, Page, 1918, pp. 187-188.
- 32 Dodd, William Edward, ed. *The Riverside History of the United States* Vol. 1, Boston, Houghton Mifflin, 1915, p. 253.
- 33 UAV. 161.201.10. box105.yasaka, Harvard University Archives.
- 34 Ibid.
- 35 *Announcement of Courses of Instruction offered by the Faculty of Arts and Sciences 1919-1920*, Cambridge, Harvard University, 1919, *Announcement of Courses of Instruction offered by the Faculty of Arts and Sciences 1920-1921*, Cambridge, Harvard University, 1920.
- 36 UAV. 161.272.5. file.i. box14.yasaka, Harvard University Archives. 注7、33、34、37の史料とあわせ、掲載の許可をいただいたハーバード大学アーカイブスのご厚意に感謝申し上げたい。
- 37 Ibid.
- 38 この時期は、第一次大戦の影響を受けてドイツへの留学生が激減し、ハーバード大学に留学する日本人が急増していた（小川原正道『慶應義塾の近代アメリカ留学生——文明の「知」を求めた明治の冒険』慶應義塾大学出版会、2023年、117-131 頁、参照）。
- 39 「CPAS 高木八尺デジタルアーカイブ」<https://iiif.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/repo/s/cpas-takagi/item?search=harvard>（2024年6月20日アクセス）。高木の講義筆記ノートについては、森山貴仁「CPAS デジタルコレクションの構築」『アメリカ太平洋研究』第22号、2022年3月、14-15 頁、参照。前掲「高木文庫」には、ハーバード在学中の教員名簿、ケンブリッジの地図、学費の支払案内や、『The Harvard Crimson』、『The Boston Herald』、『The New York Times』の切り抜き、修了後の『Harvard Alumni Association』関係書類などが含まれている（フォルダ番号・349、395）。
- 40 「Harvard 1919-1920, History 17a. Prof. F.J. Turner」 「CPAS 高木八尺デジタルアーカイブ」<https://da.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/portal/assets/61d0dd68-7e00-944a-65ab-27b8eb219303>（2024年7月7日アクセス）。
- 41 前掲「高木八尺先生に聞く (I)」、9 頁。
- 42 前掲「高木八尺におけるアメリカと日本」、124-125 頁。
- 43 前掲「高木八尺先生に聞く (I)」、19 頁。
- 44 前掲「高木八尺先生に聞く (I)」、23-27 頁。

- 45 前掲「高木八尺先生に聞く（Ⅰ）」、34 頁。
- 46 高木八尺『高木八尺著作集』第 5 巻、東京大学出版会、1971 年、272-279 頁。
- 47 高木八尺『高木八尺著作集』第 4 巻、東京大学出版会、1971 年、42-48 頁。
- 48 前掲『高木八尺著作集』第 5 巻、371-387 頁。
- 49 前掲『高木八尺著作集』第 4 巻、473-507 頁。
- 50 高木八尺「新渡戸稲造先生の宗教を中心として」『東京女子大学論集』第 16 巻第 2 号、1966 年、31-43 頁。
- 51 前掲『高木八尺著作集』第 5 巻、392-409 頁。
- 52 前掲『高木八尺著作集』第 4 巻、513-529 頁。
- 53 古矢旬「史実と思想の間——斎藤眞『アメリカ革命史研究——自由と統合』」『思想』第 825 号、1993 年 3 月、157 頁。
- 54 斎藤眞「アメリカ研究」斎藤眞他編『アメリカ精神を求めて——高木八尺の生涯』東京大学出版会、1985 年、122-135 頁。
- 55 前掲「高木八尺先生に聞く（Ⅰ）」、52-53 頁。
- 56 bMS Am2375 (5883), Folder1-3, William Ernest Hocking papers-Takagi, Yasaka, 1889-1984. Correspondence with WEH, 1932-1965, Houghton Library, Harvard University.
- 57 前掲「高木文庫」には、1933 年にジェームス・H・ウッズ、ジョージ・G・ウィルソン、ジョセフ・C・グルーといったハーバード関係者から高木に宛てた書簡、1950 年代から 1960 年代にかけてのヘンリー・A・キッシンジャーと高木の往復書簡なども多数収録されている（フォルダ番号・571、825）。
- 58 「高木八尺先生に聞く（Ⅱ）（聞き手：岩永健吉郎・斎藤眞）」『American Studies in Japan Oral History Series』Vol. 6 No. 2（1979 年）、73 頁。
- 59 前掲「解説」、548 頁。
- 60 高木八尺「米国史概観（上）——米国政治史研究の一試案」『国家学会雑誌』第 38 巻第 6 号、1924 年 6 月、849-891 頁。
- 61 高木八尺「米国近世史に於ける政治の諸傾向〔米国史概観の下〕」『国家学会雑誌』第 38 巻第 12 号、1924 年 12 月、1980 頁。
- 62 斎藤は、帰国直後の高木について、「その師新渡戸と異なり、大衆雑誌には寄稿せず、ジャーナリズムとはあまり縁をもたずに、専ら学術誌に発表していた」としている（斎藤眞「日本におけるアメリカ像とアメリカ研究〔Ⅰ〕戦前日本」斎藤眞・シグムント・スカード編『講座アメリカの文化 別巻 2（世界におけるアメリカ像——研究と展望）』南雲堂、1972 年、29 頁）。学生時代に「学者のあり方」を教えられた、小野塚を模範としていたのかもしれない。

追記 本稿は、福沢諭吉記念慶應義塾学事振興基金研究補助による研究成果である。同補助による共同研究に参画して下さった梅川健氏（東京大学大学院法学政治学研究科教授）、遠藤寛文氏（防衛大学校総合教育学群講師）、インタビューに応じていただいた古矢旬氏（東京大学名誉教授）からは、貴重なご教示を得た。資料収集・分析にご協力くださったカン・テユン氏（慶應義塾大学非常勤講師）とともに、記して感謝申し上げたい。

（おがわら まさみち 慶應義塾大学法学部）